

【特集】

IAML 日本支部第 63 回例会

(2017 年 11 月 25 日 東京音楽大学附属図書館)

【目次】

第 63 回例会「音楽情報におけるカレントアウェアネスの試み」	
例会企画について	伊東辰彦 1
Facebook グループ「音楽図書館」運用報告	
	山本宗由 2
Facebook グループ「音楽図書館」正式運用に向けての展望	久保絵里麻 4
第 63 回例会傍聴記	工藤哲朗 7
事務局だより	10

例会企画について

支部長 伊東辰彦

去る 2017 年 11 月 25 日に東京音楽大学を会場に開催された例会では、IAML 役員でもある久保絵里麻（くぼ・えりあ）さんを中心にして 2016 年以来実験的に行って来た、Facebook グループ「音楽図書館」の正式運用に向けての展望を共有し、建設的な議論をする事が出来た。現在「若手・中堅検討会」（仮称）で運用中の Facebook グループ「音楽図書館」を今後どのような形で継続し行くべきか、また Twitter その他のツール運用の可能性や、それらを利用した IAML 日本支部と本部、および他国関係機関との連携について検討する必要性も指摘された。現在、国立国会図書

館で運用されているカレントアウェアネス・ポータル (<http://current.ndl.go.jp>) 等を参考にしながら、時々刻々変化し、流動する情報をめぐる環境に、どのように即時性をもって対応出来るかと云う点は、これからの IAML の活動を考える行く上でも、大変に重要な課題である。IAML 本部でも Twitter, Facebook の運用をしており、IAML の活動をさらに周知するためにも必要な配慮と云えるだろう。その場合、最も大きな課題は、誰がどのようにして情報を取捨選択し、毎日の更新を行って行くかと言う、極めて現実的な問題であろう。そのための専従のスタッフが確保出来るような団体であれば問題ないが、ボランティア団体である場合は、個人の無償のサービスに依存する事になってしまい、持続可能性において障害になる事が考えられる。当支部として、この問題をどのように解決出来るかは、今後の課題と言えるだろう。しかし、その有用性は明らかであり、当支部としては、何らかの形でその活動を公式にサポートしていくことを提案したいと考えている。本例会で情報収集の対象や方法を探りつつ、今後は、国内の情報を国内外に向けて国外の情報を国内に向けて提供することを想定しており、英語による標記も適宜併用しながら運用していきたい。これは一つのトレーニング方法としても有効であり、音楽図書館員の育成の意味でも、可能性を秘めていると考えている。

(いとう たつひこ)

【第 63 回例会】

Facebook グループ「音楽図書館」 運用報告

山本 宗由
(愛知県立芸術大学大学院)

1 はじめに

本稿は、第 63 回例会における「音楽情報におけるカレントアウェアネスの試み」での発表内容をもとに、2017 年 4 月より若手・中堅検討会（仮称）を中心に運用してきた Facebook グループ「音楽図書館」についての運用報告を行うものである。Facebook とは、参加者が実名で登録することを特徴としたソーシャルネットワークワーキングサービス（以下、SNS）の一つであり、今回立ち上げたグループのように、特定の参加者によるコミュニティを形成する機能を持っている。若手・中堅検討会では、この Facebook の機能を利用して、音楽図書館や音楽資料等に関する情報（以下、便宜上「音楽資料情報」とする）の共有を試みた。

今回の Facebook グループの立ち上げは、2016 年 6 月に行われた第 60 回例会における、若手・中堅検討会によるパネルディスカッションに端を発する。様々なアイデアが提案されたパネルディスカッションから約 1 年が経とうとしていたが、若手・中堅検討会ではそれらを具体的な行動に移すことができないでいた。そのため、まずはすぐに着手できそうな SNS を活用した情報発信を行おうということで、筆者が Facebook グループを立ち上げた。本稿を通して、これまでのグループの概要と運用状況について報告する。なお、第 63 回例会後に、Facebook グループの扱いについて動きがあったが、混乱を避けるため、本稿では例会で発表

した時点までの状況について報告する。

2 グループの概要

まずは、数ある SNS の中から Facebook を選択した理由であるが、特定のグループを作成する機能があり、かつ参加メンバーを制限できたことから、試験的に始めるツールとしては着手しやすかったということがある。他に、Facebook と並んで主流な SNS の一つとなっている Twitter も候補ではあったが、情報共有をする上で、情報量をなるべく自由に扱える方がよいということもあったため、投稿記事の文字数が 140 字に制限される Twitter は今回除外することとした。

Facebook グループ「音楽図書館」を立ち上げたのは 2017 年 4 月 10 日のことであり、第 63 回例会が行われた 11 月 25 日の段階では、89 件の記事が投稿されていた。グループの主な目的は、参加者同士による双方向的な情報交換であったが、まずは土台となるものが必要であると考え、立ち上げから約 3 ヶ月間、筆者は 1 日 1 件を目安とした記事の投稿を行った。

現在までに投稿された記事の多くは筆者によるものであり、現状では双方向ではなく、一方的な情報提供のツールとなっている。そのため、グループ創設の目的からは少しずれるが、ここからは音楽資料情報におけるカレントアウェアネスという観点から、筆者が投稿した記事の内容について紹介する。

3 投稿記事の内容

各記事では、国内外の音楽資料情報に関する事柄を、なるべく偏りなく扱うように心がけた。また、特定の組織の情報のみを集中的に取り上げることがないよう留意した。それぞれの記事には、内容に応じてハッシュタグを付与してい

る（表、図参照）。

表 投稿記事の種類

項目(ハッシュタグ)	内容
イベント情報	学会の会議や図書館での催物の案内
プロジェクト紹介	音楽資料等を扱ったプロジェクトの紹介（収集や電子化等）
施設紹介	音楽資料を扱う施設の紹介
レファレンス紹介	レファレンス協同データベースに上げられた音楽関係のレファレンス事例
文献紹介	FONTES等に掲載された記事や、音楽資料情報に関わる文献の紹介
求人情報	音楽図書館等の職員の求人情報
IAML年次大会報告	IAML年次大会でのセッション参加報告



図 投稿記事の例（デスクトップ版）

投稿する記事に関しては、次の4つのルールを設けた。

1. 公的な情報源による信頼できる情報であること
2. 情報の出典元を明示すること
3. 投稿する個人の関心に偏らないよう、幅広い分野の音楽資料情報を収集すること
4. 検索のためのハッシュタグを付与すること

1. と2. は、このグループが私的なものではなく、信頼できる情報媒体であることを証明する上で重要な点であると考えた。また、グループの参加者が各々の関心のある記事について、より詳細な情報を得ることができるよう、

いくつかの記事では参考となるウェブサイトのURLも併記した。

3. に関しては、IAML日本支部のメンバーが、図書館員や音楽学者、その他関連機関に属する者など、多様なメンバーで構成されていることから、その中の誰かに偏った情報提供とならないよう配慮した。また、現状において当支部では数が少ないが、公共図書館で働く図書館員や演奏家などもIAMLのメンバーになり得る可能性を持っていると考え、それらの人々にも関連しそうな音楽資料情報も提供しよう努めた（例：公共図書館での音楽イベントや、新しいエディションに関する情報等）。

4. について、Facebookの機能上、過去の投稿記事を検索することには適していないため、ハッシュタグを用いることで補うこととした。記事の内容を最初から制限しないように、事前にタグを作成するのではなく、投稿記事の内容に応じてその都度タグを追加していく方式をとった。タグの語句は統制をしている（表参照）が、現状では簡易的なものしかないため、どのようなタグを設定するかは今後の検討課題であろう。

なお、記事を執筆するにあたり、主に以下の情報源を参考とした。海外で発信された情報も多かったため、その場合は適宜筆者による日本語訳を付した。

- MLA（米国音楽図書館協会）[1]、IAMLのウェブサイト、メーリングリスト
- 国立国会図書館カレントアウェアネス・ポータル [2]
- 国立国会図書館レファレンス協同データベース [3]
- 各音楽図書館等のウェブサイト、検索エンジン
- 各種ニュース、新聞社のウェブサイト
- 図書館関係の話題を扱ったウェブサイト（例：LISNews）

- ・ 図書館、音楽分野の文献データベース
(例：LISTA、RILM)

4 おわりに

以上が Facebook グループ「音楽図書館」の内容であるが、約半年間の運用を通して、毎日何らかの音楽資料情報が発信されていることを実感できた。国内では音楽資料情報を対象としたポータルサイト等は存在しないため、日々発信される情報をその都度収集することは容易ではない。さらに、情報の多くは日本語以外の言語で発信されている。今後どのような形でこのグループが運用されるかは不透明であるが、いずれにしても日本語で国内外の音楽資料情報を一元的に入手できるツールが必要となるだろう。

最後に、今後の Facebook グループのあり方についてだが、現状では前述の通り一方向的な情報発信ツールとなっている。今後は双方向的な情報共有ツールとして発展させていくのか、それともこのまま限られた発信者による情報発信ツールとして活用していくのかを考えていかなければならないだろう。

そして、最大の課題はこのグループをどのように継続させるかということではないだろうか。グループを活発化させるためには、主体的に参加できるメンバーが一定数必要となる。運用方針を定めた上で、運用に必要な人的資源をどのように確保するのか、グループの持続可能性についても十分に検討する必要があるだろう。

注

[1] <http://www.musiclibraryassoc.org/> (2018/3/22 閲覧)

[2] <http://current.ndl.go.jp/> (2018/3/22 閲覧)

[3] <http://crd.ndl.go.jp/reference/> (2018/3/22 閲覧)

(やまもと むねよし)

Facebook グループ「音楽図書館」 正式運用に向けての展望

久保 絵里麻

2017 年 11 月 25 日開催の例会では、「若手・中堅検討会」(仮称)で運用中の Facebook グループ「音楽図書館」をどのような形で継続していくのか(または継続しないのか)、その展望に加え、Twitter その他のツール運用の可能性や、それらを利用した IAML 日本支部と本部、および他国関係機関との連携について検討した。本稿ではその内容説明と例会後から現在までの経過報告を行う [1]。

1 設置までの経緯

2016 年 6 月の例会で提案したとおり [2]、「若手・中堅検討会」は、現行の IAML 日本支部ウェブサイトのリニューアルすることを一応の前提として、そこで音楽情報に関するポータルサイトを設けたり、音楽資料に関わる記事を連載したりするなど、特に会員間の交流や日本支部そのものの広報につながるような企画を提案してきた。しかし現実的にはウェブページの維持・管理が簡単ではないという懸念があった。そのような状況を打破すべく、山本宗由氏が立ち上げ、実施に踏み切ったのが Facebook グループ「音楽図書館」の運用で、2017 年 4 月に開設されて以降、ほとんど毎日更新された。



発表者らと司会者

2 利点

Facebookの仕組みを利用することで、管理者側は通常のウェブサイトの管理に要求される専門知識や技術的な面での不安からある程度解放される。グループへの参加にはFacebookアカウントが必要だが、参加者は音楽資料や音楽図書館というテーマに沿って選別された投稿記事から情報を得たり、参加者同士の情報交換を行う交流の場としても活用したりできる。IAML日本支部が、様々な関係機関や個人をつなぐ場としての役割を果たすべき組織なのだとすれば、Facebookグループは極めて有効な媒体であるといえる。

3 利用者の範囲と規定の設定

当グループは現在(2018年3月)「非公開」グループとして運用されているが、これを「公開」グループに移行することで、音楽資料や音楽図書館およびIAMLの活動に関心のある全ての人(Facebookユーザーに限られる)が参加可能となる。例会当日のディスカッションでは、「グループ参加者を当支部会員に限定し、会員制グループとする」という提案もあった。当面は誰もが参加できる体制をとり、音楽資料や音楽図書館に興味を持つ層を開拓すること、そして、IAML会員増加の呼び水となることが目標だが、当グループ内において提供される情報の質を高めることで、将来的にはIAML会員の特典としての価値を持たせることも可能であろう。

今回の試みのひとまずのゴールとしては、国立国会図書館が提供している「カレントアウェアネス-R」[3]のように、一方的に情報を提供する媒体であってもよいのかもしれない。ただ、参加メンバー各自が所属先図書館や研究機関等の情報をグループ内で投稿・共有すること

でもたらされる情報は、少数の管理者によるそれとは情報量の上ではもちろん、テーマも圧倒的に幅広く豊かな内容になることは明らかである。そのため、当グループでは、全ての参加者による投稿を許可している。しかしながら、Facebook社でも詳細な「コミュニティ規定」[4]を定めていることからわかるように、ある程度の自由を保ちながら健全な運用を続けるためには規定が必要である。当グループにおける規定は、当支部役員会での審議を経て、Facebook社が定める「コミュニティ規定」に加え、信頼のにおける情報源としての質を保てるよう「(情報提供を目的とした)記事を投稿する際には必ず出典を明記する」ことが決まった。

4 その他のSNS等活用の可能性

Facebookグループ以外に利用できるツールとして考えられるのは、同じくFacebookのサービスのひとつである「Facebookページ」や、「Twitter」が挙げられる。

Facebookページ運用にあたっては、管理者がFacebookユーザーである必要があるが、基本的に閲覧は誰にでもできるため、公式ウェブページとしての利用も可能である。実際に、IAML本部は公式ウェブページの他にFacebook公式ページを設けており、同様にFacebook公式ページを設置している支部やRISM・RILM等が投稿した情報を「シェア」[5]することで連携をとっている。こうした仕組みを活用すれば、当支部と本部をはじめとする関係機関との交流が容易になる。のみならず、それが視覚化されることで、国際組織としての役割を担う当支部像を支部内外に対して明確に提示できる。

Twitterについては、総務省の調査から10代～20代の世代においてFacebookの二倍ほどの利用者がいることが明らかになっており[6]、次世代に働きかけるのであれば積極的に利用すべきツールといえる。

5 展望

前述したように、Facebook グループ「音楽図書館」は試験運用期間中であり、「非公開」グループとして運用されているが、現在、日本国内において音楽資料に関する情報交換を目的とした SNS 等のツールが皆無であることから、今後当支部として Facebook グループ「音楽図書館」の運用を継続していくこと、Facebook 公式ページを積極的に利用することの重要性が当支部役員会での審議においても認められた。そのため、2018 年度総会において、Facebook グループ「音楽図書館」の公開および Facebook 公式ページ設置の 2 件が審議事項として提出されることとなった。

Facebook グループ「音楽図書館」に限って言えば、どのような形で利用されていくのかは、実際に「公開」グループとして運用を始めてみなければわからない面はあるが、今の段階で期待されるのは、国内における関係各機関や個人からのアクセスに加え、国外から日本の音楽資料に関する情報を求める人に対して窓口の役割を果たすことである。

例えば、現役の図書館員にとって有益な情報源となったり、学生がレポートのためのリサーチ過程で Facebook グループに辿り着いたりする可能性もあるだろう。一般の人々がこの分野に興味を持つきっかけにもなるかもしれない。

筆者の研究との関連で述べるならば、例えば、アジア圏における音楽資料やそれを取り巻く状況については、今後積極的に機関同士が情報を共有していく必要があると考える。特に、音楽資料を扱える人材の育成という、日本と共通の課題を抱えている国同士の関係機関との連携には IAML 日本支部としても積極的に関与し、そのための情報を個人なり機関なりの様々な層で共有していくことが各国内の状況改善にも役立つものと思う。

以上を踏まえ、Facebook グループ「音楽図

書館」その他の媒体を運用する上での方向性をまとめると、次の 3 つとなる。

1. 情報提供を行うこと
2. 参加者同士の情報交換の場を提供すること
3. IAML 本部をはじめ、他国支部や関係機関との連携を図ること

1. については、情報収集対象の範囲は定めていないが、国内の情報を国内外に向けて、国外の情報を国内に向けて提供することを想定している。したがって国外の情報については原文だけでなく、一部抄訳をつけることを原則としている。日本における人材育成を最優先として考えたとき、これらの情報をまずは「日本語」で発信することに大きな意義があると考えられるからである。

ただし、3. のように IAML 本部や他支部との連携を前提とした Facebook 公式ページでの告知等については、英語との併記が望ましい。

前述のとおり、2018 年 6 月 16 日開催の総会で Facebook グループの「公開」および公式ページの設置が議案として提出される予定だが、承認された場合には、同日に開催が予定されている IAML/RILM 共催国際会議を最初のニュースとして掲載することになるだろう。同会議の目的のひとつは、参加者および機関が今後のネットワークを構築することにあるが、当支部として Facebook 公式ページやグループといったウェブ上、つまり公に交流の場を用意することで、会議の意義を一層深められるのではないだろうか。

6 おわりに

最初に述べたように、Facebook グループ「音楽図書館」の運用は、「若手・中堅検討会」の提案に端を発した事業であるが、例会や当支部役員会において出された様々な指摘や意見を受けて検討が重ねられ、この度総会での承認

を俟つこととなった。今後の運用にあたっては、適宜規定を改定するなどの作業も必要になる。「若手・中堅検討会」への参加はもとより、Facebook グループ「音楽図書館」には特に若手中堅層の会員の積極的な参加をお願いしたい。とはいえ、将来的に Facebook アカウントを必要としない IAML 日本支部主導による仕組みを構築することが理想であり、今回の運用も試験的な意味合いがあること、また、会員に対して Facebook アカウントの取得を義務づけるものではないことを付記しておく。

最後に例会全体について述べる。今回は、「若手・中堅検討会」の活動報告の場でもあったため、かねてから実施を検討していた Skype での遠隔参加を試み、愛知県より伊藤真理副支部長の参加を頂いた。今回は Skype の通常の機能を用いて、パソコン一台に対して一つの Skype アカウントで対応する形式をとった。音声は十分な音量を得られ、ディスカッションも滞りなく行われた。ただ、スライド資料はパソコン付属のカメラでとらえきれず、配布資料とともに当日にメールで送付することとなった。その他改善すべき点や複数の参加者がある場合の対応等を想定し、次回の実施に備えたい。

【追記】初めての試みであった Skype の準備を含め、例会実施に際して開催前より入念な準備をして頂いた東京音楽大学付属図書館職員の皆様に改めて感謝を申し上げたい。

注

- [1] 当日のスライド資料は IAML 日本支部ウェブサイトからダウンロードできる (PDF 形式)。http://www.iaml.jp/katudo.html (2018/4/20 閲覧)。
- [2] IAML 日本支部ニューズレター。2016, 第 58 号, p.5-8.
- [3] 国立国会図書館「カレントアウェアネス R」。http://current.ndl.go.jp/car (2018/3/19 閲覧)。
- [4] 「Facebook コミュニティ規定」。https://ja-jp.facebook.com/communitystandards (2018/3/19 閲覧)。
- [5] 「シェア」はウェブ上の情報を他のユーザーと共有する目的で自分のページにリンクさせる Facebook の機能のひとつ。

[6] 総務省情報通信政策研究所「平成 28 年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」2017/7/7, http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/seika/houkoku-since2011.html (2018/3/19 閲覧)。

(くぼ えりあ)



会場の様子

第 63 回例会傍聴記

工藤 哲朗

今回の例会では「音楽情報におけるカレントアウェアネスの試み」をテーマに、山本宗由氏と久保絵里麻氏の二人による発表が行われた。

このようなテーマを取り上げるに至った背景には、IAML 日本支部における会員の高齢化がある。当支部ではこの傾向に危機感を抱き、数年前に「若手・中堅検討会」(仮称)という組織を作って打開策を模索し始めた。今回の発表者 2 人はいずれもこの会のメンバーであり、新たな会員、とりわけ若い会員を増やすアイデアとして、今回の試みが生まれた。

ただ、実のところ私は今回のテーマを当初やや懐疑的に捉えていた。「カレントアウェアネス」といっても、音楽図書館に関する情報など

果たして世の中にどれほどあるものだろうか、と。すぐに「ネタ切れ」になってしまうのではないかとさえ考えていた。

しかし、この予想は見事に裏切られた。山本氏が Facebook（以下、FB）上に設けた非公開グループ「音楽図書館」で 2017 年 4～10 月に行った投稿は約 90 件にものぼり、4～7 月初旬まではおおよそ 1 日 1 件のペースで投稿されている。取り上げられた内容は IAML の活動だけではなく、音楽関連の参考図書やプロジェクトの紹介、図書館で催されるイベントの情報（大学・専門・公立等様々な館種にわたる）など、多様に富み、広がりを持ったものだった。しかも投稿はいずれも典拠が示されており、信頼性も高い。結果的に、私は音楽図書館界というのはこれほどまでに動きと広がりのあるものだったのかと今更ながら思い知らされることになった。加えて、FB という媒体は比較的若い世代を中心に多くの人々が 1 日～数日に 1 回程度は習慣的に見るものだから、仮に当支部がそこで誰でも閲覧可能な形で投稿を行えば、多くの人に音楽図書館界の活発な動きを日常的に知ってもらうことができ、IAML という団体の知名度向上にも繋がっていくのではないかと強く感じた。

ただ、その実現までの過程には検討すべき事項もある。以下では質疑応答の際にフロアから出た指摘なども掬い取りつつ、主要な論点を洗い出し、私見を述べたい。

まず重要なのは閲覧・投稿・（投稿への）コメントに関する権限の問題である。個人的には、閲覧は誰もができる状況でなければあまり意味がないと思う。閲覧者を制限しては、結局 IAML 内部だけの活動に終わってしまい、外部に対するアピールにはなり得ない。当然新たな会員の獲得にも繋がらない。まずは音楽図書館の世界と IAML という団体の存在を少しでも多くの人に知ってもらえるよう、投稿は誰もが閲

覧できる状態にすべきだろう。ただし、公開に向けた一つのステップとして、当支部の役員や会員という枠で閲覧に制限をかけ、その状態で試験運用を行うという方法はあり得よう。

一方で投稿の権限は、まずは当支部会員またはその中の特定の担当者に限った方がよいのではないだろうか。確かに、誰もが投稿可能とする方向性も魅力的ではある。そうすれば参加のハードルは低く保ちつつ、情報の速報性を高めることができるし、参加者が各々投稿してくれる、特定の担当者に負担が集中するようなこともない。最終的にはある種の「集合知」を実現できる可能性もある。しかし、FB での投稿を当支部の公式活動とするならば、当支部が個々の投稿に一定の責任を負う必要が出てくるだろう。そうであれば、投稿に関してはまずは当支部がコントロールできる形にした方が無難に思われる。もちろん FB での活動を「非公式」や「半公式」と位置付け、そうした責任を回避する方法も考えられなくはないが、それではこの活動を当支部の組織の中で位置付けたり、この活動に携わる会員に支部として何らかの報酬を与えたりすることが却って難しくはならないだろうか。また、閲覧と合わせて投稿もしてくれるユーザーの数は未知数であり、最初から閲覧者による投稿を頼みとするのはやや確実性に欠けるようにも思える。さらに、会員以外も投稿可能となると、音楽図書館や IAML とは隔たりのある投稿が増えてしまい、FB グループの方向性そのものがぶれてしまう恐れもある。このように、投稿への責任、活動の安定性、活動の方向性の保持等の観点では、まずは投稿権限を当支部会員またはその中の担当者にのみ与えて運用していくのが良いと考える。投稿権限を会員外に拡大するのは、その状態での運用が軌道に乗ってから検討するのでも遅くはないだろう。

なお、投稿に対するコメントについては、原

的に個々人の名前の下で行われるものと考えられ、これに対して当支部が責任を負う必要はまずないだろうから、閲覧と同様に誰もが行える形にしても問題ないだろう。

各種権限の次には、投稿基準・運用規定の設定も課題だ。今回の試みでは、FB上の投稿はすべて山本氏一人が行ったが、個人の関心に偏らず、IAMLに関係する個人・団体だけを利することのないよう配慮した以外は特に明確な基準・規定はなかったようだ。しかし、今後この活動に複数の人が関わり、継続させていかなければならないとすると、何らかの基準またはチェック体制が必要だろう。とはいえ、チェックを行うとなるとその分投稿に時間がかかり、速報性は失われてしまう。私自身もここで明確な案の提示はできないが、数項目程度の極めてシンプルな基準・規定を役員または全会員で承認し、投稿は原則各担当者に一任する、というのが試験運用を続けるにあたっては妥当なラインではないだろうか。

活動の継続性もまた大きな問題である。山本氏が発表の中で述べた通り、投稿をある程度の頻度で長く続けていくのには相当の労力が必要となる。当支部の中で特定の担当者を決めるとしても、今回の試みはあくまで発案が若手であるというだけで、その試みを支えることは年齢やFBユーザーか否かに関係なく可能なはずだ。投稿の材料となるトピックを見つけたり、それに簡単な紹介文を付したりすることは当支部会員なら誰もができるだろう。この活動を継続していけるかどうかは、若手やFB担当者といった特定の会員ではなく、むしろそれ以外の会員の参画の度合いにかかっているのではないかと私は感じている。

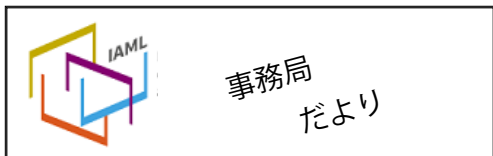
その他で気になった細かい点としては、まず非FBユーザーの会員との情報共有がある。当支部会員でFBを使っている人は決して多数派ではない。ゆくゆくは、FBに投稿した内容を

当支部ウェブサイトでも公開するなど、非FBユーザーの会員も含む当支部全会員が情報共有できる方策を考えなければ、全会員が一致してこの活動に協力することが難しくなる恐れがある。また、久保氏はFB以外のソーシャルネットワークワーキングサービス（以下、SNS）への展開の可能性にも言及されていたが、FBは原則実名で、現実の個人同士の繋がりで情報をやり取りするSNSである。このため、時にFBグループへの参加はハードルが高く、投稿した情報の流通範囲も現実の人間関係の範囲に限られやすい。これに対し、例えばTwitterは匿名のユーザーも多く、個々の投稿（ツイート）がリツイートや検索の機能を通してより自由に流通している印象がある。FBでの活動が軌道に乗った後には、特性の異なる別のSNSの併用も検討してよいと思う。さらに、今回の試みにはすでに先行する事例もいくらかある（例えば、国立国会図書館関西館図書館協力課の「カレントアウェアネス・ポータル」等）。投稿基準の策定などにあたっては、こうした先行事例の関係者を例会に招くなどして積極的に意見聴取を行い、参考としても良いのではないだろうか。

以上のように様々な課題はあるものの、この試みが継続されるべきものであることは疑う余地がない。また、上記の課題の中には実践を積み重ねる中で解決の糸口が見えてくるものもあるだろう。私も一会員として、何らかの形でこの試みが実を結ぶのを助けられればと思う。

なお、余談となるが、今回の例会では試行的にSkypeを使用して伊藤真理副支部長が名古屋から参加、質疑応答も行った。この方法なら、東京近郊以外に住む図書館員等も気軽に会合に参加でき、当支部の会員増加にも繋がるのではないかと感じられた。今後も同様の試みが継続されることを期待したい。

（くどう てつろう）



日本支部総会・例会のご案内

既報の通り、下記の日程で開催されます。今年度第 1 回の例会は国際会議として開催いたします。当会議は会員以外の方でもご参加いただけます。ふるってご参加ください。

○総会

日時 6月16日(土) 13時～14時

場所 立教大学(池袋キャンパス) 12号館2階会議室

○例会：IAML/RILM 共催国際会議

「アジアの音楽情報と国際協力の推進：音楽資料の調査と音楽図書館の連携 Music Information in Asia and Advancement of International Collaboration: Searching the Music Source and Connecting the Music Libraries」

日時 同日 14時～17時45分(13時半受付開始)

場所 同上 12号館地下1階第1 & 2会議室

○情報交換会(会費制) 18時15分～20時

於セントポールズ会館1階松本楼

詳細は、国際会議専用ウェブサイト (<https://iamlilrmikkyo2018tokyo.jimdo.com>)

もしくは右記のQRコードへアクセスしてください。



Fontes Artis Musicae 電子版利用のお願い

IAML 本部より、印刷費用削減のために、是非電子版をご利用いただきたい旨の連絡がありました。当誌は現在、JSTOR (1954-2015) および Project Muse (2016-) で全号のアクセスが可能となっています。

印刷体の送付を中止するには、本部会計担当 Thomas Kalk 氏 [treasurer@iaml.info] にその旨をご一報くだされば完了です。手続きについては動画 (<http://www.iaml.info/news/how-stop-receiving-print-fontes-30-seconds>) でも確認できます。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

Liesbeth Hoedemaeker-Cohen Fund 国際大会参加補助金

国際大会参加旅費を補助することを目的とした当補助には 30 人以上の応募があり、今年は情報リテラシー教育に貢献することが期待されるマニトバ大学〔カナダ〕音楽図書館館長の Katherine J. Penner 氏が選ばれました。補助金は今後も継続される見込みです。支部会員のみならずもふるってご応募ください。

『日本目録規則 2018 年版予備版』公表

日本図書館協会目録委員会は、3月28日『日本目録規則 2018 年版予備版』ページを開設し、公表を開始しました。各章ごとに PDF ファイルで提供しています (<http://www.jla.or.jp/committees/mokuroku/ncr2018/tabid/718/Default.aspx>)。また、従来の「NCR2018 (仮称)」ページを「日本目録規則 (NCR) 2018 年版関連情報」と名称変更して更新しています ((<http://www.jla.or.jp/committees/mokuroku/tabid/643/Default.aspx>))。

メールアドレス確認のお願い

IAML 本部では電子メールを利用した選挙が予定されています。メールアドレスの変更や新規登録をご希望の方、また新年度で住所等が変更になっている場合は、事務局長藤堂 (yasuko.todo@nifty.ne.jp ; 電話・FAX 03-3485-3717) までお知らせください。

Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部
第 63 号

2018 年 5 月 10 日発行

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部
〒171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5
東京音楽大学附属図書館 <http://www.iaml.jp>